

自己の生き方についての考えを深める道徳学習指導に関する開発的研究

福留 忠 洋 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

永田 佑 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

A development study on method of instilling life's moral lessons

FUKUDOME Tadahiro · NAGATA Yu

キーワード：豊かな人間性、自己の生き方についての考えを深める、6年間のつながりを明確にした学習内容、子どもの学習活動を充実させる指導方法

1. 研究の背景

生きる力を育むことは、知識基盤社会といわれるこれからの社会やグローバル化がますます激しくなる時代においても重要視されている。改めて、時代を超えて変わらない、調和のとれた人間形成の必要性が強調されたといえる。その中でも、「豊かな人間性」は、生きる力における重要な要素であり、そのような豊かな人間性をもった人を育成することが求められている。それは、これからの変化の激しい社会において、人と協調しつつ自律的に社会生活を送ることができるようになるために必要な要素であるからである。「豊かな人間性」は、美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性、正義感や公正さを重んじる心、生命を大切にし、人権を尊重する子などの基本的な倫理観、他人を思いやる心や社会貢献の精神、自立心、自己抑制力、責任感、他者との共生や異なるものへの寛容などの感性及び道徳的価値を大切にする心であると学習指導要領解説に定義付けられている。

このような豊かな心を育成し、基盤となる道徳性を養うのが道徳教育である。学校の教育活動全体を通じて行われる道徳教育は、これからの社会に重要視される道徳性を育む上で、大切な役割を担っている。そして、道徳教育の「要の時間」として位置付けられている道徳の時間は、道徳性を育成する上で、重要な存在である。それは、道徳の時間において、教育活動全体で行われている道徳教育が調和的に生かされ、計画的、発展的な指導によって、子どもたちの道徳性は一層豊かに育まれていくからである。

そのような道徳の時間は、「教育活動全体で学習した道徳的価値を自分のものとしてとらえ、発展させていこうとする子ども」「将来、出会うであろう様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような子ども」を育む時間であると私たちは考える。私たちが育んでいきたい子どもは、「人としてよりよく生きようとする子ども」とも言える。なぜなら、人間は本来、「人としてよりよく生きたい」という願いをもっている存在であり、上に述べた子どもの姿は、まさに、その願いを実現させるために必要となる態度や資質・能力を備えていると考えるからである。人としてよりよく生きたいと願う子どもは、豊かな人間性をもち、これからの社会において、人と協調しつつ、自律的に社会生活を送り続けることができるようになると思う。

そのような考えの下、豊かな人間性を育成していくという立場から、本校のこれまでの子どもの様子を全体的な視点で見た時、さらに充実させたり、高めさせたりする必要があることが明らかになり、その要因から、本校の子どもたちの豊かな人間性の基盤となる道徳性を十分に育てていくために、教師の指導を改善したり充実したりする必要があるのではないかという考えに至った。つまり、子どもたちの道徳性を育むために、道徳教育の要である道

徳の時間の指導について、新たな視点を加えて見つめ直し、要因の解決となるものを見出すとともに、これからの道徳授業の在り方を創造していく必要があると考えた。そして、そのことを踏まえた学習指導が計画的、発展的に行われることによって、自己の生き方についての考えを深めることとなり、道徳性が着実に育まれていくのではないかと考えた。さらに、そのことが、豊かな人間性を育てていくことにつながり、これからの変化の激しいこれからの社会に改めて必要とされる、生きる力を育てていくこととなると考えた。

2. 研究の方向

前述した子どもたちの姿の要因を解決していくために、道徳性はどのように発達していき、どのような点に留意して育成していくかを改めて考えなければならない。

人間は、人間が生まれてきた時から道徳性を身に付けているのではなく、その萌芽をもって生まれてくる。社会における様々な体験を通して開花し、それぞれが固有のものを形成していく。そのように形成されていく道徳性をよりよく育むためには、人間が生まれながらにもっている、よりよく生きたいという力を引きだしていくことが大切である。その際には、道徳性は様々な体験を通して開花していくという考えから、体験の中でのかかわりを豊かにしていくことや道徳的価値に対して、自分の生き方の指針として捉えるために、道徳的価値への自覚を深めていくことが必要である。

つまり、道徳性を育む道徳教育の要である道徳の時間は、これまでの自分の生き方を道徳的価値に照らし合わせながら思考させることで、自己の生き方についての考えを深め、子どもたちにとって、道徳的価値が自分にとって意味のあるものであり、それを大切にしながら、これからの自分の生き方を豊かなものにしたいという思いをもたせることになると考える。

上記のことを踏まえ、道徳の時間を充実・改善していく観点として、「よりよく生きる力を引き出すこと」「かかわりを豊かにすること」「道徳的価値の自覚を深めること」の3つを設定していくことにする。この3つの観点が相互に作用した道徳の時間によって、子どもたちは、これまでの様々なかかわりの中で見つめてきた道徳的価値を自分のものとして捉え、自分の生き方をよりよくし、豊かなものにしていこうとするであろうと考える。そして、充実・改善された道徳の時間を計画的、発展的に指導していくことで、子どもたちは、自己の生き方への考えを深める力を持ち、人としてよりよく生きようとする子どもの姿へと近づいていくものと考えられる。

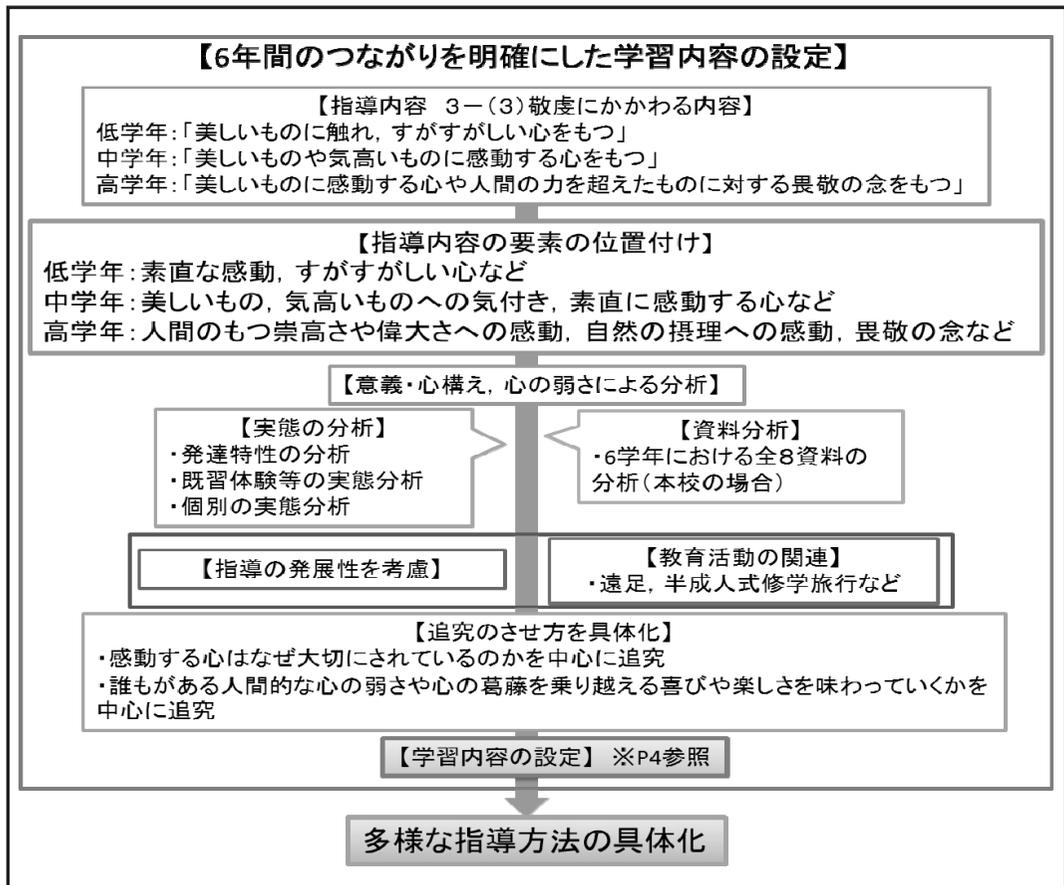
そこで本研究では、道徳の時間の充実・改善の3つの観点を、さらに実際の授業レベルで具体化することで、道徳の時間を改善・充実していく必要な力や態度を明らかにしていく。そして、それらが表出された道徳授業はどのようなものかを意図的・計画的に位置付けると共に、学習内容の設定や指導方法の考え方を見出し、具体化していく。

3. 研究の内容

3.1. 自己の生き方についての考えを深める道徳学習指導の基本的な考え方

(1) 6年間のつながりを明確にした学習内容設定における基本的な考え

道徳の時間において、学習内容を設定することは、何を学ばせるかを明確にすることであり、教師側がねらいに迫っていく過程において明確にしなければならないことである。それは、指導方法を具体化していく際の基盤となるものである。学習内容を設定するためには、指導内容の解釈や分析を基に、各学年の発達段階を踏まえた指導内容の要素、児童の実態分析及び資料分析、指導の発展性及び他教育活動との関連を図ることを要件とする。

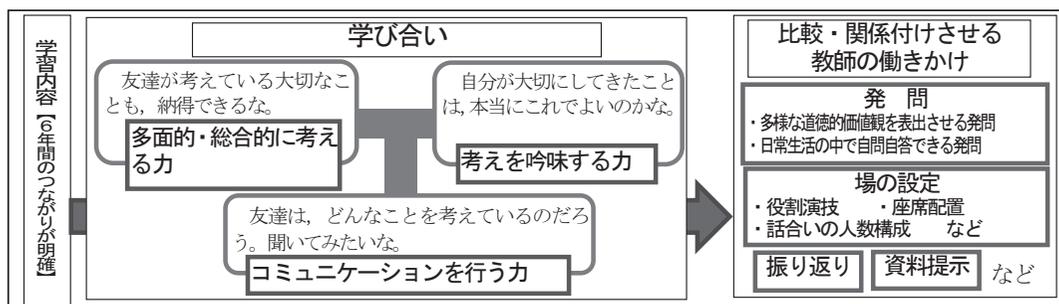


【図1：6年間のつながりを明確にした学習内容設定の具体的な流れ】

そして、実際に指導する子どもたちの実態を踏まえ、道徳的価値はなぜ大切にされているのかを中心に追究していくか、誰もが人間的な心の弱さや心の葛藤を乗り越える喜びや楽しさを味わっていくかを中心に追究していくかを明らかにした上で、計画的・発展的に学習内容を設定することも必要となる。そうすることで学習内容は、子どもたちにとってよりよい生き方を考える上で価値あるものとなると考える。

(2) 6年間のつながりを明確にした学習内容設定の具体的な流れ

学習内容設定までの流れを3－(3) 敬虔にかかわる内容で述べる。学習指導要領では、低学年「美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ」、中学年「美しいものや気高いものに感動する心をもつ」、高学年「美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ」と示されている。以上の指導内容における指導上の留意点から、まず共通点(感動する心)や差異点(対象の違い等)を見出し、それぞれの段階における要素を位置付ける。次に、意義や心構え、心の弱さの3つの観点から具体的に分析する。それらを基に、実態として子どもたちがどのような体験をしているかを分析したり、資料のどこを中心に扱うかを分析したりする。さらに、遠足や半成人式、宿泊行事などのかかわりのある教育活動を洗い出したり、これらを踏まえて指導の発展性を考慮したりすることで、低学年の「すがすがしい心をもつ」といった一見感覚的になりがちな内容を、何を対象として、どのように育むかを中学年・高学年と比較しながら明確にする。それらを受け、子どもの実態に応じて追究のさせ方を具体的に位置付け、6年間のつながりの中で学習内容を明確にしていく(図1)。



【図2 学習内容の設定から教師の具体的な働きかけまでの流れ】

3.2. 自己の生き方への考えを深める指導方法について

(1) 多面的・多角的に考え、議論させる多様な指導方法の基本的な考え方

これまでに設定した学習内容をよりよく学び取らせるためには、自己の生き方への考えを深めさせるためには、子どもたちが切実感をもって自分の生活と関係付けて学び取る必要があると考える。

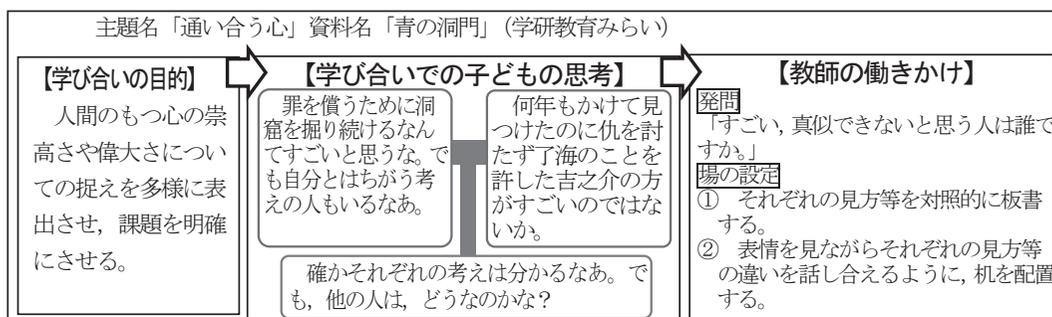
そこで、道徳的価値観について、多様な価値観があることを前提として多面的・多角的に考えさせる学び合いを通して、自分自身の道徳的価値観を再構成していくことが重要であると考え。

その際は、自分の道徳的価値観を互いに比較・関係付けして追究しよう（コミュニケーションを行う力）とする子どもたちが、資料中の人物の生き方や友達の道徳的価値観に共感したり（多面的・総合的に考える力）、批判的に捉えたり（考えを吟味する力）しながら考えることを通して、新たな見方・考え方・感じ方に気付かせていく。また、資料中の人物の生き方を自分自身に置き換え、自分自身の生活場面とつなげて考えさせていく。そのために、順位や共通性を問うといった子どもたちの多様な道徳的価値観を表出させる発問や、道徳の時間の中で問うたことを日常生活の中でも改めて自分自身に問うといった日常生活の中で自問自答できる発問、自分の立場や姿を明確にさせる役割演技などの場の設定など、教師がどのような手立てを講じていくかを明確にすることが必要であると考え（図2）。

(2) 多面的・多角的に考え、議論させる多様な指導方法の具体例

多面的・多角的に考え、議論させる指導方法として、主題名「通い合う心」資料名「青の洞門」では、次のような指導方法が効果的であると考えた。

人間のもつ心の崇高さや偉大さについて、子どもたちの多様な道徳的価値観を表出させるために、「すごい、真似できないと思う人は誰ですか」と問う。この問いから、「何十年も人のためにやり続ける了海の偉大さ」と「積年の恨みを許した吉之介の偉大さ」に共感する見方等を表出させ、それらを基に共感的・批判的に捉えさせながら「自分が吉之介だったら許すことができるだろうか」といった課題を明確にし、共有させる（図3）。



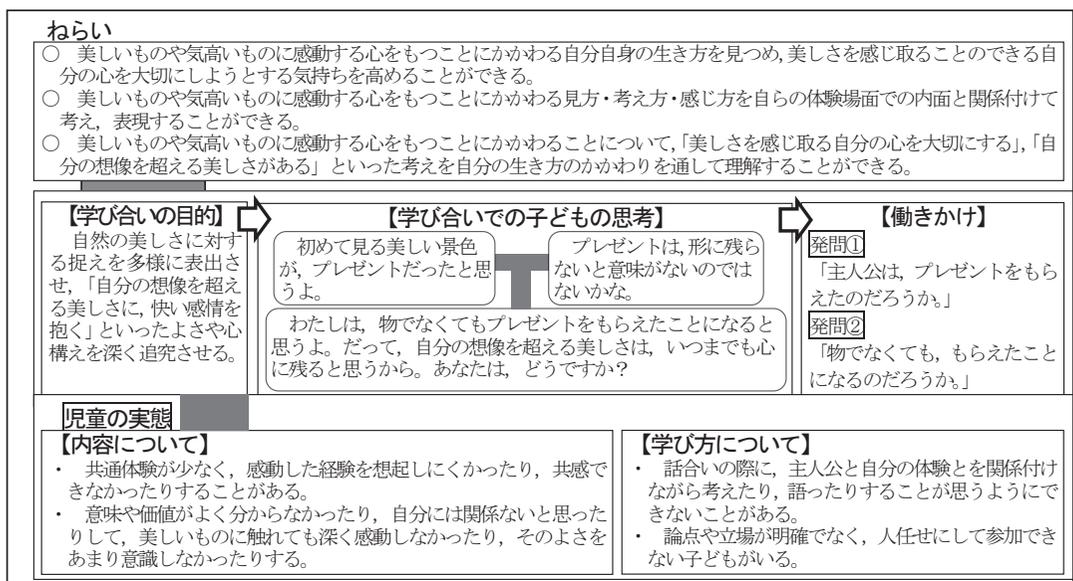
【図3：教師の具体的な働きかけの具体例】

表1 一単位時間だけでなく、6年間のつながりを明確にした学習内容設定の実際

【低学年】3-③ 美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。 指導内容の要素: 気持ちのよさ, 素直な感動, すがすがしい心				
1学年の 実態	好奇心旺盛で、身の回りの様々なことに関心をもち、自然の美しさや心地よい音楽などを素直に感じることができる。しかし、自己中心的な考えなどから、その美しさに気付けないこともある。			
説明	重点的に扱う内容 (意義 心構え 心の弱さ)	主題名・資料名	学習容	関連する教育活動
6月	弱: 自己中心, 楽観的な考え	①見ていなくても ②おつきさまがみている	心の葛藤	生活: 楽しい学校 特活: 係活動
2学年の 実態	自然の美しさや心地よい音楽, 名作物語などに触れて素直に感動し、自分の心がすがすがしくなることを感じている。しかし、そのように感じられる自分の心の美しさや人の心の美しさについては、あまり感じる機会が少ない。			
6月	心: 美しさは、人の心にもある	③うつくしい心 ④ひかりのほし	価値理解に重点	生活: 散歩② 特活: 係活動
【中学年】3-③ 美しいものや気高いものに感動する心をもつ。 指導内容の要素: 美しいものを美しいと感じる快さ, 気高さへの気付き, 素直な感動				
3学年の 実態	自然の美しさや人の心の美しさに触れて、自分の心が感動することを体験してきている。しかし、自分には関係ないと感じたり、そのものの意味や価値を実感できなかったりして、感動する心を大切にしたいと感じないこともある。			
説明	重点的に扱う内容 (意義 心構え 心の弱さ)	主題名・資料名	学習容	関連する教育活動
12月	心: 人のことを考える自分の心を大切に する	⑤心のうつくしさ ⑥花さき山	価値理解に重点	学校行事: 宿習学習 特活: 係活動
4学年の 実態	自然の美しさや人の心の美しさに触れて感動し、それを感じる心を大切にしようとしてきている。しかし、そのものの意味や価値が分からずに深く感動できず、そのよさを実感しないこともある。			
12月	意: 快い感情, 自分の成長 心: 自分の想像を超える美しさがある	⑦ことばにできない ⑧十才のプレゼント	価値理解に重点	学級簿: 春の日記 特活: 半成人式
【高学年】3-③ 美しいものに感動する心や人間の力を越えたものに対する畏敬の念をもつ。 指導内容の要素: 人間の心のすばらしさ, 自然の偉大さ, 人間の業を超える偉大さ				
5学年の 実態	壮大で神秘的な自然に感動したり、人の心のもつ美しさや力強さに心を打たれたりすることを体験してきている。しかし、自己保身などから、美しいものや素晴らしいものを素直に感じられないこともある。			
説明	重点的に扱う内容 (意義 心構え 心の弱さ)	主題名・資料名	学習容	関連する教育活動
1月	弱: 自己保身, 利害損得	⑨本当の美しさ ⑩美しいお面	心の葛藤	絵: ぼんぼり 学校行事: 祖父母参観
6学年の 実態	壮大で神秘的な自然に感動したり、人間の偉業に触れてその偉大さを感じたりして、自分自身の成長に気付くことがある。しかし、その偉大さと自分の存在を比較して、より深く捉えるまでには至っていない。			
12月	意: 自分の成長, 他者の尊重, 信頼関係 心: 人の心の偉大さに触れ, 自分を省みる	⑪通い合う心 ⑫青のどう門	価値理解に重点	絵: 雁ヶ沢の川 学校行事: 修学旅行

3.3 自己の生き方についての考えを深める道徳学習の実際

(1) ここでは、敬げんにかかわる内容について、学習内容設定と指導方法との関連を具体化する (表1, 図4, 図5)



【図4：ねらいと学習指導方法の具体】

- (2) 第4学年 主題名「ことばにできない」におけるねらいと学習指導方法について (図4)
- (3) 授業の実際 資料名「十才のプレゼント」光文書院 (図5)



【図5：発問と児童の思考の流れ】

(4) 実践のまとめ

一単位時間だけでなく、6年間のつながりを明確にした学習内容設定により、本時で学び取らせたい内容がより明確になり、それぞれの立場を基に多様な道徳的価値観を表出させたり、自分自身の生活とつなげて考えたりさせる発問を設定するなど、効果的な手立てを講じることができた。それにより、子どもたちが、主人公と自分自身を関係付けて考え、美しい自然に感動する心について主体的に追究する姿が見られた。このことは、敬けんにかかわる内容について、子ども自身が自己の生き方への考えを深めることにつながったと考える。

4. 研究のまとめ

4.1. 成果

- 学習内容を明確にし、子どもたちが考え、議論している様相を想定した上で、発問や場の工夫をした。そのことにより、互いの道徳的価値観に基づいた考えを比較・関係付けしたりしながら、道徳的価値への見方・感じ方・考え方を深めたり広げたりする学習指導ができ、子どもが主体的に道徳的価値観を再構成していこうとする姿が見られた。

4.2 課題

- 「特別の教科道徳（道徳科）」となる上で、新設された指導内容については、学習内容を6年間のつながりを明確にして設定していく必要がある。
- 子どもたちが主体的に、道徳的価値について多面的・多角的に考え、議論し、それぞれの道徳的価値観を再構成していけるように、学習過程の柔軟な取り扱いや読み物資料のみを中心教材としない授業展開の在り方など、さらに研究を深めていく必要がある。

付記

本報告は、鹿児島大学教育学部附属小学校平成 25～28 年度研究紀要で発表した研究内容等に基づき、その研究成果をまとめたものである。

参考文献

- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説 道徳編」（東洋館出版社 平成 20 年）
- ・新道徳教育事典（第一法規出版社 昭和 55 年）
- ・假屋園昭彦著「教師と児童とが対話をとおして道徳的価値を発見する授業デザインの開発（Ⅱ）」（鹿児島大学教育学部研究紀要 第 65 巻 2014 年）

